

# 財政再建から地域再生へステツプアップ RESTART元年を経た夕張市の今

## 再び動き始めたまちづくりの時計

今や日本一有名な果物といっても過言でない夕張メロン。驚愕の高値を付けるその初競りの結果は、毎年、日本に初夏を呼び込む歳時記のような形で報じられてきた。そして今年も、5月26日(土)に夕張メロンの初競りが行われ、2玉で何と320万円という過去最高額を記録した。

そしてこれまでの例では、初競りで落札された夕張メロンは、その価格のあまりの高さから高級料亭、都内の百貨店などに並ぶものと、ほぼ相場が決まっているかのように思われていた。

ところが今年の初競りは違った。夕張市内でメロンなど青果物の梱包関連事業を営む経営者が、「夕張関係者」として初めて、落札したのだ。さらに落札された夕張メロンは、夕張市農協銘産センターに展示された後、6月

1日に観光客など先着60名限定で、「極めつけの初物」を味わってもらうイベントが開催された。

報道によればこの落札主は、「夕張が話題になって、観光客がもっと増えてくれれば」との願いを込め、過去最高額での落札をあえて行ったのだという。

このニュースを知って、偶然にも初競り前日の5月25日(金)に鈴木直道・夕張市長にインタビューさせていただき、市内各所を取材させていただいたばかりの取材者は、鈴木市長がその際に語った、「夕張のコミュニティ力の強さ」という言葉を改めて想起した。鈴木市長は、さらにこう続けた。

「同じ炭鉱で働くすべての鉱員と家族は一つの大きな家族であるとする意味合いの『二山一家』という考え方が、夕張には古くからあります。それは財政破たん後のこの10年間、財政再建最優先の結果として、恐らく全国最低ランクの行政サービスしか受けられない

すずきなおみち  
鈴木直道  
夕張市長



いにもかかわらず、夕張の再生を信じながら、夕張に残ってくださった市民の皆さん。また同様に、全国最低ランクの給与で頑張り続けてくれた市職員の間にも、いまだに濃厚に根付く、夕張のDNAのようなものといえるでしょう」

ご承知のように夕張市は、2007年に財政再建団体(現・財政再生団体)に指定され、財政再建は昨年3月で丸10年が経過した。その間の夕張市の努力は、まさに並大抵のものではなかった。



鈴木市長と市民が心を通わせ合ってきた「ふれあいトーク」

「夕張市はご承知のように、353億円の債務を抱えて破たんし、財政再建団体に指定されました。353億円を2008年度から2026年度までの18年間で返済する計画



夕張メロンの初収穫(今年5月)

で、再建計画開始から10年が経過した2016年度末の段階で残額は237億円にまでこぎ着けました。10年間で116億円を返済したことになります。今後はさらに2026年までの8年間に、毎年平均26億円を返済していく予定ですが、再建開始10年の節目となった2016年度末、北海道庁を通じて国に申し入れていた『夕張市財政再建計画の変更(抜本的見直し)』が総務省の同意を得られ、2017年度からは範囲が限定的ではありますが、地域再生(まちづくり)も実施していくことができるよ



うになりました。いわば『10年間止まり続けていたまちづくりの時計の針』を、再び動かせるようになったのです。かくして夕張市は2017年度を「RES TART元年」と位置付け、新たに「保育料の第2子以降の無料化」「中学生までの医療費無料化」「住環境整備施策」など計35のまちづくり事業に着手することができた。これら35事業を含めて、一方で相変わらず厳しい財政再建を進めながら、今後は並行して2029年度までの13年間で、計46事業のまちづくり事業に総額138億円を投資する「財政再建と地域再生の両立」を、実行していく予定なのだ。



障がい者の雇用のもとでも有望な薬木栽培(植栽中)



RESTARTとともに復活した「夕張市石炭博物館」



今も随所に残る「旧炭鉱住宅」

## みんなが待ち望んでいたことを実現

「全国最低ランクの行政サービス」「全国最低ランクの市職員給与」「それだけでなく、例えば市長の給与、議員報酬なども全国最低ランク」という市長の言葉が如実に示すように、財政再建策がとりあえず順調に進んでいる半面、地方自治体としての夕張市のありようを見るとやはり、さまざまな水準が急激に低下しつつあるのが現実だ。

夕張市は炭鉱景気が全盛だった1950年代半ばごろ、人口約12万人を擁する道内でも

有数の都市規模を誇っていた。

しかし、明治時代から続いた夕張炭鉱は1990年までにすべて閉山。同年に実施された国勢調査では、人口は2万人強にまで減少していた。さらに財政破たんが発覚した2006年に約1万3000人となっていた人口は、2015年の国勢調査では8800人台にまで落ち込み、今も少しづつ減少しつつある(夕張市地域人口ビジョンでは、2040年の総人口は約4500人、2060年は約2600人と目標値が定められている)。

付随して、昨年5月には市内全域の高齢化

率が50%を突破した。また財政再建計画がスタートする前年の2006年5月に414名在籍していた小学生は現在、200名を下回っている。現在、7校あった小学校は1校に4校あった中学校も1校に統合されている。

このような状況が進行しつつある最中の昨年4月、「RESTART元年」を迎えたのだ。夕張市はもとより、市民の胸に兆した新たな「希望の光」のまばゆさは、いかにかりのものだったろう。それは今年3月7日、第1回定例市議会でも表明された「平成30年度市政執行方針」冒頭での、鈴木市長の次の言葉に端的に示されている。

「昨年3月、不可能だと言われ続けてきた財政再生計画の抜本見直しを現実のものとし、(中略)RESTART元年と位置付け取り組んできた平成29年度がまもなく終わろうとしています。(中略)平成30年度は着実に財政の再建を進めるだけではなく、必死に取り組む、10年の時を経て動かした『地域再生』という時計の針が二度と止まることのないよう動かし続けるとともに、止まっていた時間、その遅れを取り戻すため、スピード感をもって新たな財政再生計画を、計画から現実のもの

# 夕張市

市 政 ル ポ

(北海道)

のに変えていかなければなりません。(中略)まさに『挑戦の年』であります」

この新しい地域再生計画の中でひとときわ目立つのが、「この10年間、モノクロームのストッブモーシヨンのようだった夕張の景色が色鮮やかに変わるような事業」(鈴木市長)の数々だ。

具体的には「2019年度に複合施設を、2020年度に認定こども園を、2022年度に診療所をそれぞれ開設」していくことになる。

前述のように、夕張市ではこうした新たなまちづくり事業について、RESTART元年となった2017年度から2029年度までの13年間に、総額138億円を投資すると明言している。

「これらの事業の主財源となるのは、全国各地から寄せられた個人からの『ふるさと納税』による寄付金、さらには『企業版ふるさと納税』として、例えばニトリホールディングス(5億円)やヤマラ(3億円)などの企業からもたらされた寄付金などの集成です」

このうち例えば2019年度に完成予定の複合施設は、市民ホールなど多様な機能を併せ持った「集い、学び、楽しむ」をテーマとする拠点複合施設である。また2020年度完成予定の認定こども園については、「夕張の自然に囲まれた素晴らしい環境の中で、子ども



来年3月には廃止が決まっている石勝線夕張支線の代わりに1日10往復のバス便が決定

たちがのびのびと健やかに遊び、学べる施設、同時にほかの都市の子どもさんたちにも、こんなこども園なら引越してでも通いたい(笑)と思ってもらえるような、そんなユニークで楽しい施設にしたい」と鈴木市長は抱負を語る。

ちなみに新しい施設や住宅の多くは、夕張市がコンパクトシティ化を進めるに当たって、新たな中心地として位置付けている清水沢地区に集中させる。

炭鉱町として急速に発展していく過程で、夕張川沿いに散在する鉱床とともに、細く長く市域が展開することになった夕張市において、人口減少が極端に進んだ今、各種施設や住宅地などを同一エリアになるべく集めるコンパクトシティ化は不可欠の施策といえる。



廃校になった夕張小学校は今や市民活動の拠点

新たな施設を清水沢地区に集めるのは、その大きな第一歩でもある。

## 雇用の場の創出に努力

2022年度完成予定の診療所も含め、以上のように、次世代の育成に不可欠な子育て支援や高齢者福祉関連の事業だけではなく、子育て世代「働き盛り世代を引き付ける」「雇用の場の創出」事業の計画についても、いかにも夕張らしさが横溢して特徴的だ。

例えば石炭の採掘の際に出る捨石(ズリ)を集積してきたズリ山(九州などではボタ山)



国内外から熱心なファン・映画関係者が集う「ゆうばり国際ファンタスティック映画祭」



観光客にも大人気な世界の名画看板が並ぶシネマストリート

から、使える石炭を再選炭するズリ山再生事業は、地域資源を活用したエネルギーの地産地消につながるものであり、夕張市ではその推進に向け、北海道ガスと連携協定を締結している。

エネルギーの地産地消ではさらに、豊富な森林資源を活用した木質バイオマス事業なども注目されるが、新たな森林資源の醸成とい

う観点から注目したいのが、市有林における薬木（漢方薬の原料となるキハダ、ホオノキなど）の植栽事業だ。

「2018年度だけで1万本の薬木の植栽を実施する予定で、すでにかなり進みつつあります。この事業に関しては、当市に企業進出してくださった（株）ツムラとの連携により、将来的に夕張市を日本一の薬木生産地にしていきたいと考えています」

夕張市での薬木植栽事業は、世界的な漢方薬メーカーとしても知られるツムラの見解によれば国内市場はもとより、広大な中国市場

での飛躍が予測されるという。

「北海道は中国の人たちにとって、空気も水も極度に清浄な、一種の理想郷のような地という憧れがあるのだそうです。その清浄な環境にはぐくまれる薬木は、漢方薬の本場・中国の人たちにもとても魅力的な存在なのです」

鈴木市長はさらに「この薬木植栽地については、さまざまな障がいを持つ人たちの就労の場、仕事体験の場としても活用していきたい」とも抱負を述べる。

雇用場の創出という意味では、やはり観光産業の振興を抜きには語れない。夕張市における観光産業といえは、炭鉱が斜陽産業となる中、1980年代に、「炭鉱から観光へ」というキャッチフレーズの下、大規模施設の建設を中心に展開され、やがて財政破たんのキツカケになった「負の事例」が思い出される。

しかし、これからの夕張観光事業の展開は、インバウンド対策なども念頭に置きつつ、前述の薬木植栽の背景ともなっている北海道らしい自然の美しさを前面に出したコンテンツ（エコツーリズムなど）の開発や、映画ロケ地を活用した「幸福の黄色いハンカチ想い出ひろば」、北海道らしい広大でエキゾチックな雰囲気「マウントレースイスキーパー」など、既存の人気施設などを活用した、無理のない、身の丈に合ったものになりそうだ。

# 夕張市

(北海道)

市 政 ル ポ

## 夕張の置かれた現状は日本の未来

さて、財政再建(再生)団体からの脱却の始まりを意味する「RESTART元年」となった2017年を受け、その動きを本格化する年度と位置付けられている今年(2018年)は、夕張を国内最大級の炭鉱地区に育て上げるキツカケとなった夕張川上流の大露頭(石炭の鉱脈が露出してある場所)の発見(1888年)から130年目の節目に当たる。さらに夕張市の前身である夕張町の誕生(1918年)からはちょうど100年目。夕張市の市制施行(1943年)からは75年目の節目でもある。

夕張市にとっていろいろな意味で記念すべきこの年に、自らも市政2期目の最終年度という節目を迎えている鈴木市長は、よく知られているように、元東京都職員だった。そして財政再建団体になったばかりの夕張市に、東京都から派遣されて初めて夕張市にやってきたのは2008年、すなわち夕張市が財政再建団体になった翌年であるとともに、ちょうど10年前のことだった。

全国最年少の首長として、財政再建団体の長に30歳で就任した鈴木市長の動向は、常にマスコミの注目を集めてきた。だが財政再建と地域再生を同時に推進することになった鈴木市長による「夕張・再生」は、これからがいよいよ本番となる。

その基盤となるのは、「この10年間、市民の皆さん、市職員のみんなが待ち望んでいたことを具体的な形にしていくべく策定した」とする、前述の「夕張市地方人口ビジョン及び地方版総合戦略」である。

左写真(総合戦略策定委員会の集合写真)にもあるように、特に総合戦略の策定については、老若男女合わせて多くの市民が参画した。人口減少が急速に進む夕張市においては、単なるお題目ではなく、「市政へのあらゆる世代の参画」が不可欠なのだ。

夕張市における「コミュニティ力の強さ」を物語る言葉として「一山一家」という独特の表



RESTARTのための総合戦略は市民協働で策定

現を本文の冒頭近くでご紹介した。この夕張のDNAを一言で表現する言葉を、総合戦略で大きく扱うことになったのは「参画した夕張高校の生徒の発案だった」と鈴木市長。

夕張市でなくとも人口減少は否応なく全国で進行する。さまざまな理由からその歩みがいよいよ速く、高齢化率も50%超の夕張市だが、若者たちが「まちの将来」を見つめる目はそれでも曇りがたない。

「夕張が置かれた状況は日本全国の自治体にとって40年、50年先の未来」とする鈴木市長が牽引する夕張市の今後から、目を離すことはできない。

(取材・文：遠藤隆／取材日平成30年5月25日)



夕張高校の生徒たちがプロデュースした多目的の「バス待ちスポット」